活動成果報告会

報告の様子は「道東テレビ」のYouTube チャンネルで配信しています。

津別高校独自のカリキュラムである「つべつ学」。２年生が受けている「つべつ学Ⅱ」では、北海道大学の学生の力を借りながら「理想の津別町」をテーマに１年間探究してきた。昨年１２月１４日には、中央公民館で活動成果報告会が行われ、21 名（２名欠席）の生徒が大学関係者や町民へ向けて自分たちの提言を発表。さまざまなアイデアが出され、まちの活性化へとつながるヒントで溢れていた。

▲活動成果報告会で高校生が自分のアイデアを大学関係者や町民へ向けて発表した

大学生と高校生がそれぞれのテーマについて熱い議論を繰り広げている▼

成果報告会では、ＨＡＬＣＣが今年度の高大連携授業の年間スケジュールを紹介し、大学構内にて実施した「津別マルシェ」の活動成果について報告しました。ＨＡＬＣＣはその中で、高校生たちの「論理的思考と表現力の成長」や「地域への理解と共感力の深化」を感じ取れたと振り返りました。

また、内閣府地方創生推進室主催の「地方創生★政策アイデアコンテスト２０２４」への応募政策に加え、津別町に対する独自の政策提言２つ、計３つの政策提言を発表しました。

その後、高校生21名（２名欠席）一人ひとりの提言を聴いた北海道大学公共政策大学院の武藤准教授は、「大人が言葉にする前に諦めてしまうような提案がたくさんあり、非常に印象に残った」と絶賛し、高校生たちの発想力や熱意に感銘を受けた様子でした。

高校生が思い描く津別町の未来

『花で町に彩りを』をテーマにまちの魅力発信について1年間取り組んできた千葉柚奈（ゆずな）さん（津高2年生）。町内に花の彩りが少ないことに気付き、自分なりの解決策を模索してきました。

現在、町内では大通り沿いにサルビアやマリーゴールドが植えられていますが、その開花時期は8月から9月までと限られています。秋になると広葉樹が枯れてしまい、町の景色がどこか寂しい印象になる点に課題を感じた千葉さん。

これを解決するため千葉さんが提案したのは、春夏秋冬それぞれの季節に合わせた花を、町のイベント会場や道路沿いに植える「シーズンフラワーロード」計画です。春にはスイセンやチューリップを双子の桜周辺に、夏にはアスターやパンジーを夏まつり会場である河岸公園に、秋にはコスモスやインパチェンスを紅葉マラソンのゴールである小学校に、冬にはスノードロップやクロッカスをアイスキャンドルまつり会場であるさんさん館周辺の道路に設置してみてはどうかと考えました。

この解決策に至るまでには、ＨＡＬＣＣの存在が大きかったと話します。「自分のアイデアを膨らませてくれるヒントをもらいました。自分たちに合う意見に的確な助言をしてくれます」

さらに、ＨＡＬＣＣとの交流を通じて「広い視点で全体を見渡す力」が身についたことも、新しい発見だったそうです。

『津別町をもっとｂｉｇに』をテーマに木材を利用した魅力発信について1年間調べてきた前田陽向（ひなた）さん（津高2年生）。町に遊ぶ場所が少ない現状が、子どもたちの訪問減少、ひいては少子化につながっているのではないかと問題提起し、自ら解決策を模索してきました。

「私が思い描く理想の津別町は、日本一のアスレチックパークを作ることです」と語る前田さん。そのアスレチックパークは、町内産の木材を活用し、子どもから大人まで楽しめる施設にする構想です。さらにキャンプ場も併設することで、家族連れで訪れることができ、町の新しい魅力として広がりを持たせたいと考えています。

このアイデアの背景には、津別町の魅力が町外に十分に伝わっていない現状がありました。また、住民満足度調査で公園の遊具に対する不満の声を目にしたことで、町民や訪問者が楽しめる場所を作りたいという思いが強まったそうです。

前田さんは、アスレチックパークの建設によって、若い子育て世代が町に集まり活気が生まれること、さらにアスレチックを通じて子どもの運動能力向上を図り、将来的にはオリンピック選手を輩出する町にしたいというビジョンも提案しました。

「自分から積極的にＨＡＬＣＣと関わるようにしていました。大学生がさまざまな課題解決に対する考え方を教えてくれたのが、とても勉強になりました」と話します。